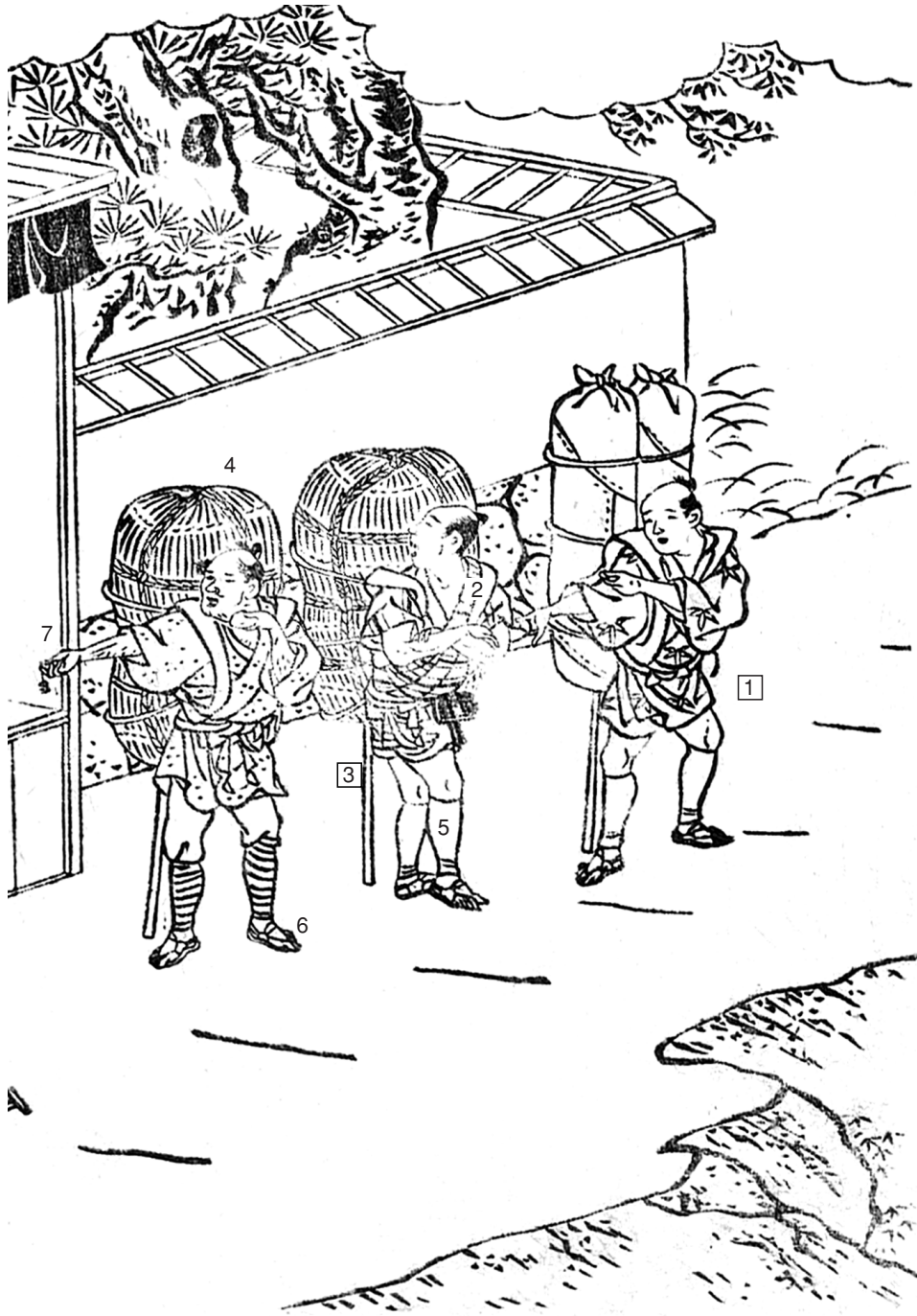


37 走井の名水



逢坂の関近くにあった、名水として有名な走井水と、井戸の前に建てられた茶店を描く。店内では巡礼の女性がくつろぎ、扇子を持った武家風の男が一服しようと店内に上がっている。店頭で娘たちが餅を作っているが、これは販売促進効果も狙ったものであろう。餅売り場の前で一休みしている3人の男

たちは、立ったまま休んでいる。後方から遅れて来る男が持っている「息杖」はT字型になっており、立って休む際、背負った荷を支えることができた。1人の男が娘に銭さして餅代を払っている。先を急ぐため、立ち食いで済ませてしまおうというのだろう。



- 1 立ったまま休む
- 2 背負い紐
- 3 息杖で荷を支える
- 4 俵
- 5 脚絆 (守貞)
- 6 草鞋
- 7 銭
- 8 暖簾「走井・はしりゐ」
- 9 櫛
- 10 島田髻 (我衣)
- 11 振り分け荷物
- 12 菅笠 (我衣)「西国順礼」
- 13 行李
- 14 上がりかまち
- 15 長羽織
- 16 扇子
- 17 鉢
- 18 煙草盆
- 19 笊
- 20 姉さんかぶり
- 21 柄杓
- 22 桶
- 23 天秤棒
- 24 孫庇
- 25 向う鉢巻
- 26 片肌脱ぎ
- 27 尻からげ (嬉遊)
- 28 盤台

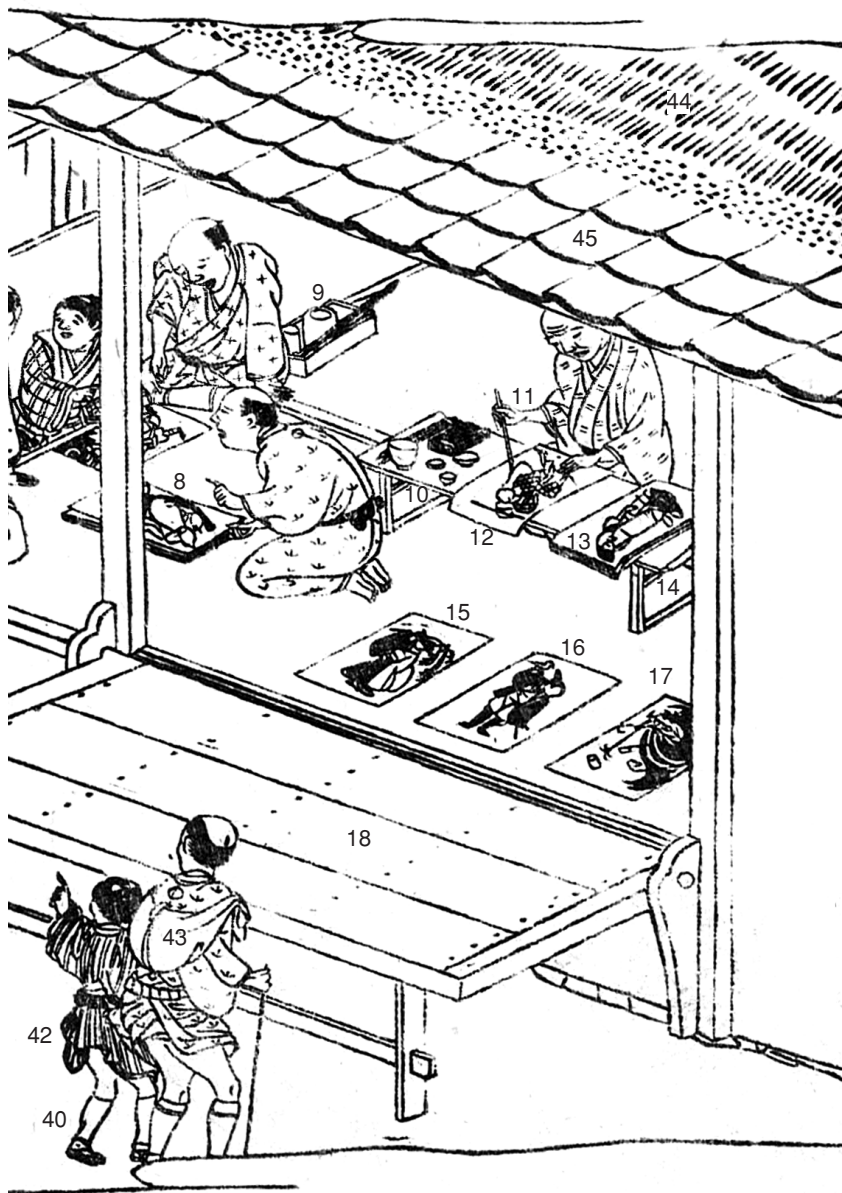
自噴する井戸からこんこんと水が湧き出し、その脇では女性が柄杓ひしゃくですくった水で桶の中の穀物を洗っている。排水口の前では2人の男が天秤で担ってきた魚を選別している。(富澤)

38 大津絵販売店



大津絵の販売店の店先を描いている。大津絵は価格の安い商品であり、それを商う店もみずぼらしい。絵ではそのことを、所々の壁が落ちて、小舞竹が見えていることで表現している。店は、吊るし看板で典型的な大津絵である「鬼の念仏」を軒先に掲げている。そして店先の壁に大きな大津絵の軸装したものを掲げ、また床にはやはり大津絵を並べている。その前には上げ見世が引き出されており、客が気軽に座って、絵を見ることができるようになっている。

3人の客が店先に入って、絵を前に品定めをしている。手前左側の人物は煙管で煙草を吸い、肩には手拭いを掛けている。その隣の少年と談笑しつつ買物をしようとしている。旅姿ではないので、地元の親子連れであろうか。店員は身を前に乗り出して絵の説明を熱心に行っているようである。客に示している絵は大津絵の代表的な図柄の一つである「瓢箪鯨」のようである。店の中央では、おそらくこの店の主人でもある絵師が筆を執って大津絵を描いている。



- 1 看板
- 2 大津絵・鬼の念仏
- 3 大津絵
- 4 菅笠の裏
- 5 羽目板
- 6 煙管
- 7 手拭い
- 8 大津絵・瓢箪鯨
- 9 煙草盆
- 10 絵皿
- 11 絵筆
- 12 大津絵・槍持ち
- 13 大津絵・大黒
- 14 文机
- 15 大津絵・藤娘
- 16 大津絵・鷹匠
- 17 大津絵・雷と錨
- 18 上げ見世 (守貞)
- 19 腰つき障子
- 20 腰板
- 21 小舞竹
- 22 土壁
- 23 犬
- 24 羽織
- 25 菅笠
- 26 ぱっち (守貞)
- 27 荷物を脇に抱える
- 28 杖
- 29 向う鉢巻
- 30 肩入れ
- 31 煙草入れ
- 32 手綱
- 33 腹掛け
- 34 尻がい
- 35 三宝荒神 (膝栗毛)
- 36 天秤棒
- 37 もっこ
- 38 息杖
- 39 柄袋
- 40 脚絆
- 41 股引
- 42 尻からげ (嬉遊)
- 43 風呂敷包み
- 44 草屋根
- 45 棧瓦

店の前では、親子連れと思われる2人がいるが、子供は看板の大津絵を指さして、親に向かって注意を促しているようである。

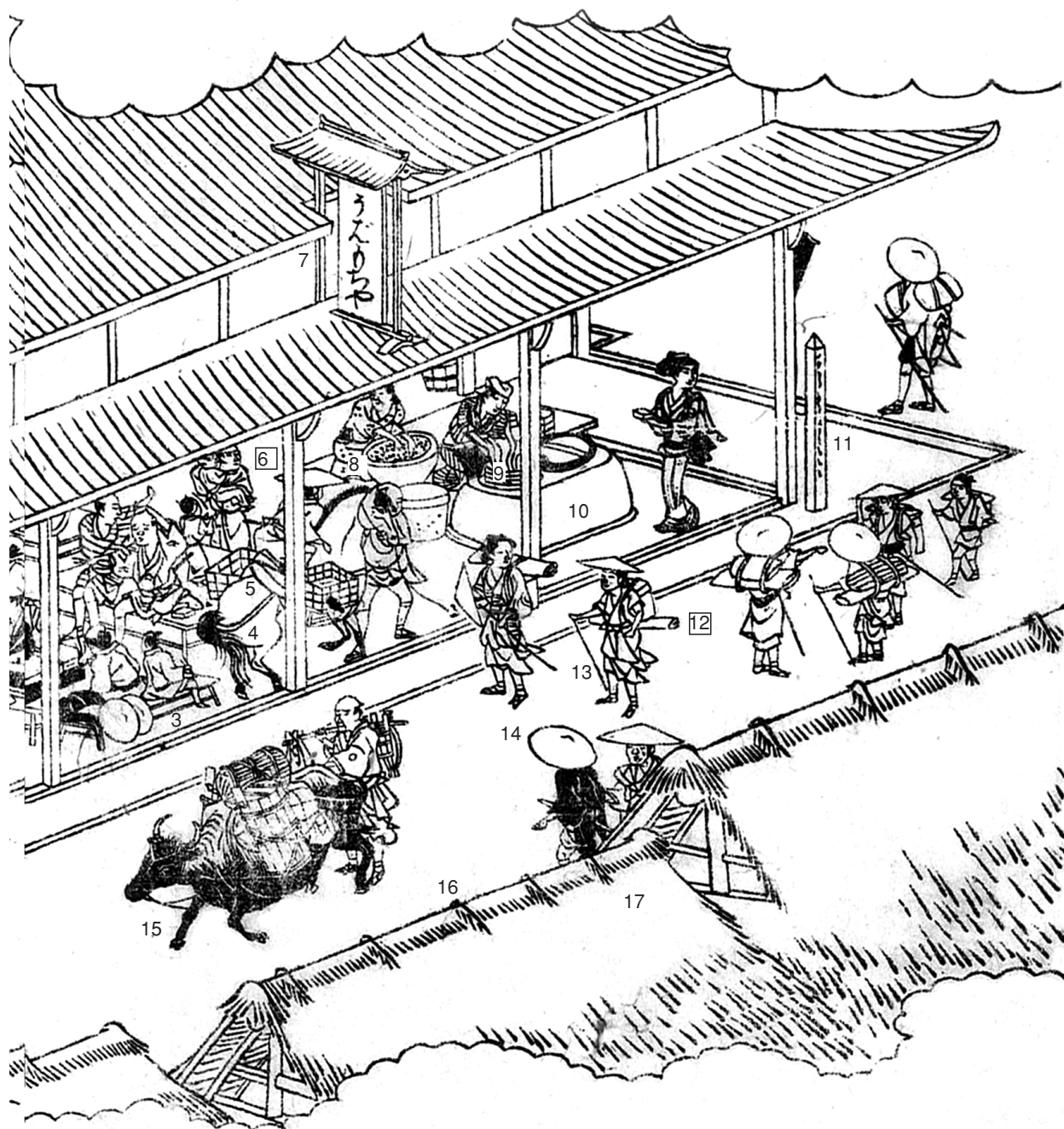
店の前の往来には、さまざまな旅人が行き交っている。1頭の馬に3人が乗っている三宝荒神が描かれ、その脇には天秤棒でもっこを吊るし、そこに細長い袋を入れて運んでいる人物が描かれている。遠くから担いできたのであろうか、店の前で肩から天秤棒を外し、息杖で支えている。(福田)

39 草津の姥ヶ餅



- | | |
|-------------------|------------|
| 1 看板「うばもち」 | 14 笠 |
| 2 駕籠 | 15 牛 |
| 3 縁台 | 16 棟押さえ |
| 4 馬 | 17 草屋根 |
| 5 三宝荒神（膝栗毛） | 18 槍 |
| 6 子供を抱く | 19 両掛け（用心） |
| 7 屋根看板（守貞）「うばもちや」 | 20 築地塀 |
| 8 木鉢 | 21 荷を担ぎあげる |
| 9 蒸籠 | 22 草鞋の紐を結ぶ |
| 10 竈（守貞） | 23 縁側 |
| 11 道標 | 24 千鳥破風 |
| 12 菓産を丸めて担う | 25 破風 |
| 13 杖 | |

草津宿の南にある東海道と琵琶湖の矢橋渡し場への分岐点に店を構えていた「うばもちや」を描いている。分岐点である店の角には道標が立っている。街道に面して広く店を開けている。正面の庇の上には「うばもちや」の看板を載せている。店の土間部分に竈が設置され、餡を煮て作っており、その後ろでは餅にあんこをつけている。多くの縁台が置かれ、大勢の客が座を占め、姥ヶ餅を食べている。馬に乗



ったまま店に入る者や駕籠に乗ったままの女性客もいる。武士の一行は横から庭に入り、座敷に上がって食べたことが知られる。弘化5年（1848）に伊勢参宮をした讃岐の人の道中日記「伊勢参宮献立道中記」（『日本庶民生活史料集成』20所収、1972）は、旅の途次に宿泊した旅籠や立ち寄った料理屋、茶店などで食べた献立を詳しく記録しているが、そこに草津姥ヶ餅が記録されている。店が大変賑わってい

ること、また姥ヶ餅は大変美味しいこと、そして餅には上品・下品の2種類があることを記している。

路上には西国巡礼の女性たちと思われる出で立ちの姿も見える。各人莫産を巻いて背中に載せ、笠を被り、杖をつくという共通の出で立ちである。また牛の背中に荷物を載せた運搬姿も見られる。（福田）

40 目川の茶店



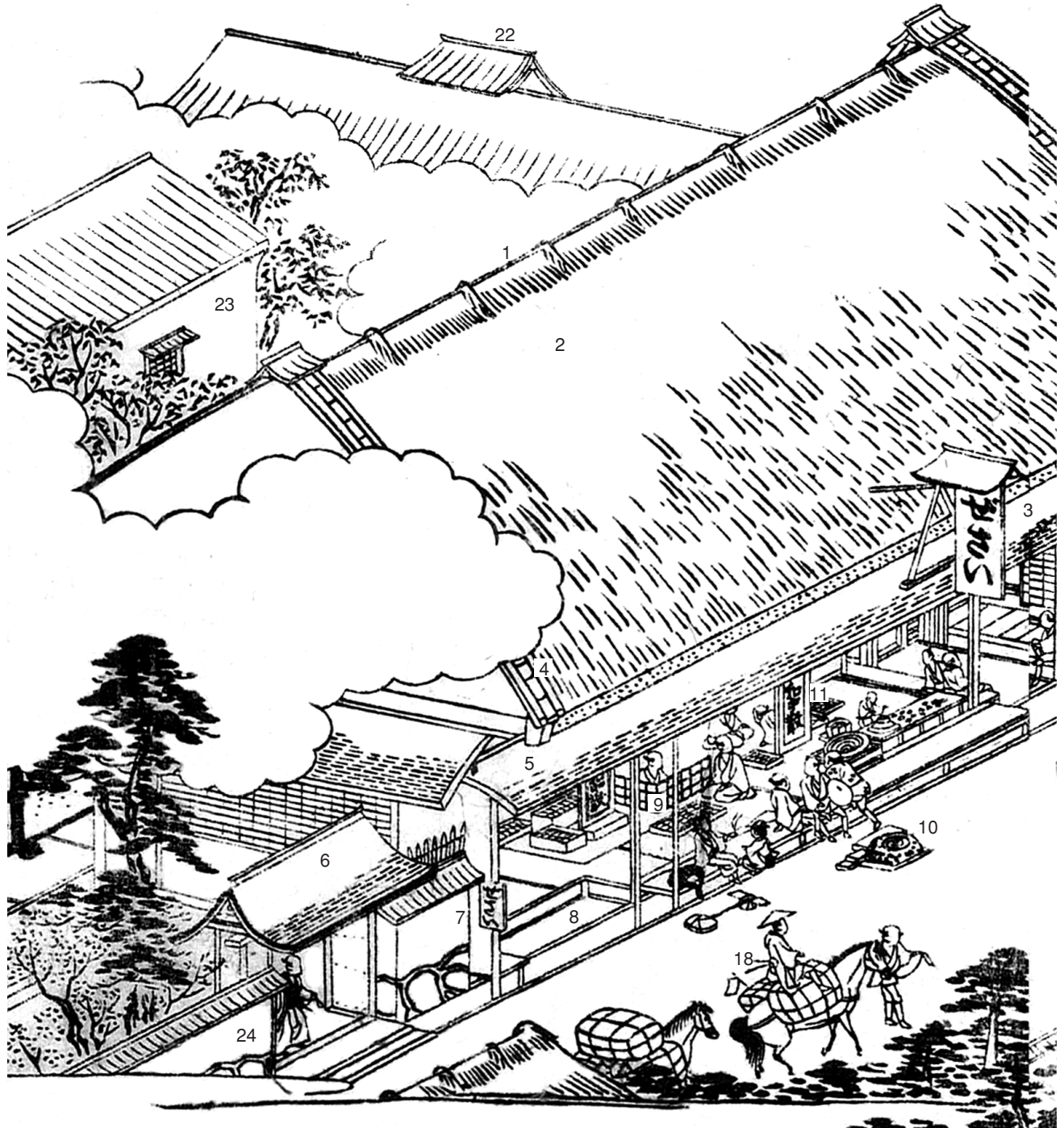
- 1 暖簾「いせや」
- 2 駕籠
- 3 田楽
- 4 縁台
- 5 日除け
- 6 馬
- 7 乗り掛け馬
- 8 まねき
- 9 築地堀
- 10 扇子
- 11 手足をあげて踊る
- 12 牛
- 13 荷駄
- 14 牛方
- 15 大棟
- 16 貫
- 17 束
- 18 千鳥破風

草津から石部に行く途中にある目川は地名であるが、むしろ名物の茶飯と田楽の代名詞のようになっていた。詞書でも「目川とは村の名なれど、今は名物の茶飯に田楽豆腐の名に襲いて、何国にも目川の店多し」と記している。中央に伊勢屋というのれんを掛けた茶店を描いている。店には馬や駕籠で通った旅人が休憩に入り、食事をしている。前庭には大きな棹に縛り吊るされた多くの旗が見られる。この茶店と懇意にしている各地の講社の名前が書かれているものと思われる。店の前の道路では、扇子を持って足をあげ踊っている様子が描かれている。伊勢参宮に出かけた一行を出迎えたサカムカエの人たちが嬉しくなって踊っているように見受けられる。店の正面の道路上には女性の一行が見られる。少女も含まれている。やはり参宮の一行であろう。

(福田)



41 梅木和中散の店構え



- | | |
|------------------|--------------|
| 1 棟押さえ | 13 吊し看板「ぜさい」 |
| 2 草屋根 | 14 厩 |
| 3 屋根看板 (守貞)「ぜさい」 | 15 寄棟 |
| 4 降り棟 | 16 井戸 |
| 5 庇 | 17 薬師堂 |
| 6 客門 (守貞) | 18 乗り掛け |
| 7 看板「ぜさい」 | 19 両掛け (用心) |
| 8 たたき | 20 駕籠 |
| 9 帳場 | 21 槍 |
| 10 手水鉢 | 22 煙出し |
| 11 「和中散」 | 23 土蔵 |
| 12 障子 | 24 築地塀 |

東海道の草津宿と石部宿の間の六地藏村（現滋賀県栗東市六地藏）にある和中散の店構えを描いている。東海道の面して大きな店を構えているだけでなく、その向かい側に馬をつないでおく長屋まで描き込まれている。現在も基本的に同じ配置でその姿を示している。大きな棟の母屋の屋根には、その端に降り棟がつけられ、豪壮な様相を強めている。店の庇の上には「ぜさい」と記された看板が下げら



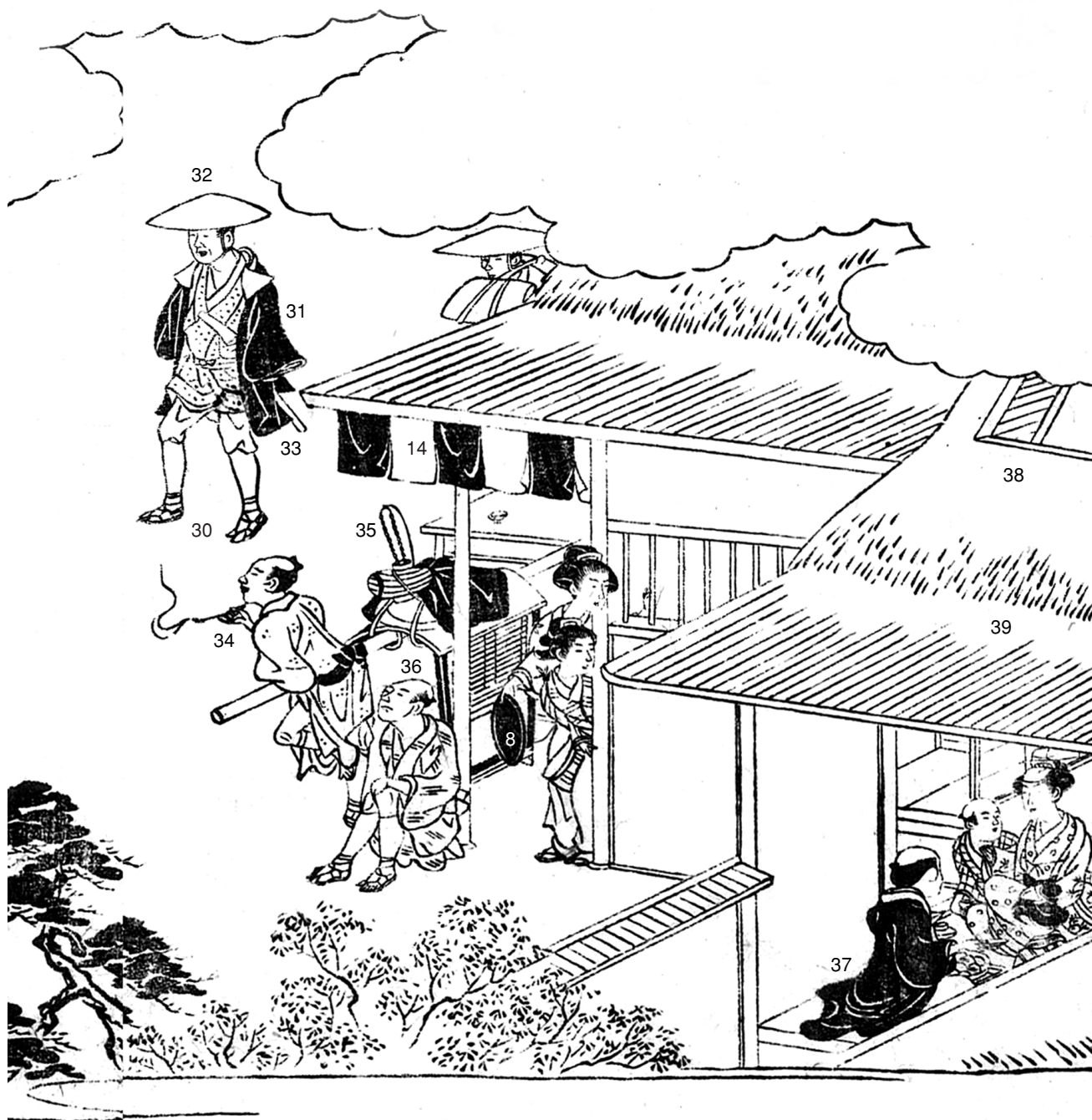
れ、軒下にも「ぜさい」と記した看板を下げている。ぜさいは六地藏村で和中散を売る店の屋号で、数軒の家が同一屋号を用いていた。図に描かれたぜさいはその中でも最も大きい大角家の店である。店先には和中散が置かれ、客が買い求めている。奥には帳場がある。東海道に面した店であるが、道路上に手水鉢が置かれている。旅人が手を洗い、あるいはのどを潤すためのサービスであろうか。この店を描い

た他の図像には見ることができない。街道を挟んだ反対側には、長屋状の厩があり、来客用に使用されるのであろう。その厩をくぐり抜けた所に薬師堂と立派な井戸がある。和中散は暑気・熱病み・腹下しなどに効く薬で、旅には不可欠な道中薬として有名であった。(福田)

42 富田の焼き蛤

- 1 火鉢 (膝栗毛)
- 2 団扇
- 3 火箸
- 4 松笠
- 5 籠
- 6 前垂れ (守貞)
- 7 綿帽子
- 8 盆
- 9 碗
- 10 だらり結び (都風俗化粧伝)
- 11 ちろり (守貞)
- 12 木具膳 (守貞)
- 13 大皿
- 14 暖簾
- 15 折敷 (守貞)
- 16 棚
- 17 鉄鍋
- 18 竈 (守貞)
- 19 皿
- 20 蛤
- 21 大籠
- 22 会符 (膝栗毛)
- 23 本馬 (用心)
- 24 尻掛け
- 25 腹掛け
- 26 轡
- 27 手綱
- 28 編笠
- 29 片肌脱ぎ
- 30 草鞋
- 31 合羽 (守貞)
- 32 笠
- 33 道中差し (用心)
- 34 煙管
- 35 弓張提灯
- 36 駕籠
- 37 羽織
- 38 草屋根
- 39 下屋



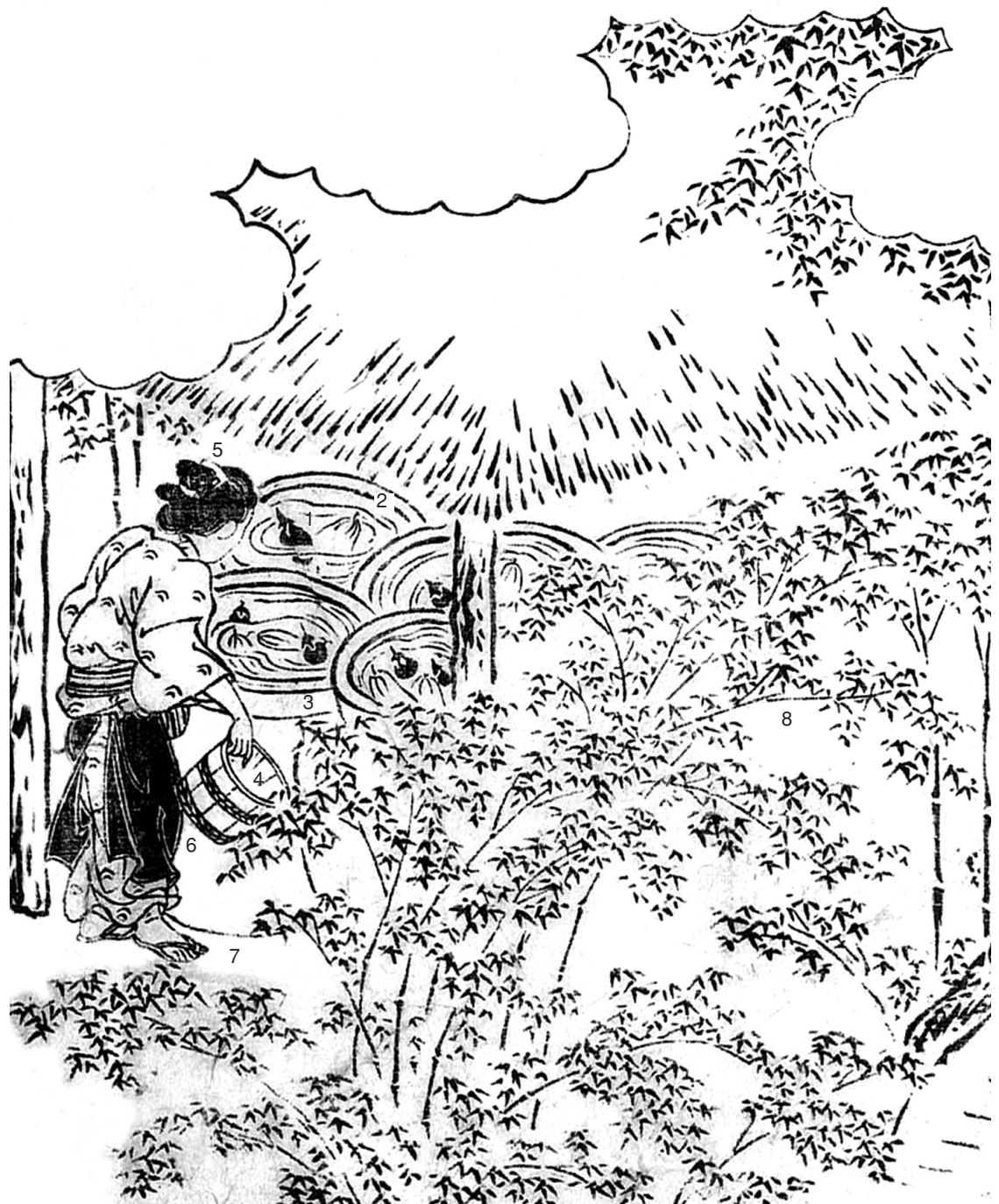


桑名と四日市の間にある富田おぶけで多く軒を並べていた、焼き蛤の店先を描く。蛤を焼く火鉢ひどこの構造は、土で固めた四角い囲炉裏のような箱の中に灰を入れ、この上に蛤を並べて松笠で焼く。店先で焼いて見せ、茶屋娘が旅人にこれを勧める光景は、『伊勢参宮名所図会』『東海道中膝栗毛』などでも描かれている。左側で蛤を焼く後ろには、竈に鍋がかかっており、こちらは佃煮の時雨蛤であろうか。盆

に湯気の上昇した碗を乗せて給仕する茶屋娘が運んでいるのは、この時雨蛤を使った茶漬けのようでもある。ちろりも見えることから、焼き蛤を肴に酒を飲んだ様子がうかがえる。道を挟んだ反対側には、離れ風の座敷で、身分の高そうな家族連れが食事中である。名物と聞いてわざわざ賞味に訪れたのか、表に置かれている駕籠は、この家族がしたててきたものであろう。(山本)

43 阿波手の社と漬け物

- 1 茄子
- 2 瓜
- 3 瓶
- 4 桶
- 5 櫛
- 6 前垂れ (守貞)
- 7 草履
- 8 竹林
- 9 足袋
- 10 扇子
- 11 羽織
- 12 笠
- 13 茶筌髪 (守貞)
- 14 裾をつまむ
- 15 肩に担ぐ
- 16 風呂敷包み
- 17 下がり結び (都風俗化粧伝)
- 18 風呂鍬
- 19 刃先
- 20 籠
- 21 向う鉢巻
- 22 片肌脱ぎ
- 23 脚絆
- 24 草鞋



尾張国海東郡萱津かやづ（現愛知県海部郡甚目寺町）の海辺近くにある阿波手神祠かみがきの神籬を描く。萱津の里は古くは鎌倉への街道筋にあり、阿波手浦、阿波手杜などは和歌に多く詠まれた名所であった。そのため、東海道の本筋からややはずれた場所でありながら、故事来歴が紹介されている。本文記載の社伝では、イザナギ・イザナミを祭神とし、産子からは粟

殿とよばれていたとある。五穀・瓜・茄子・大根などの初生りを神前に供える習慣があったようだ。また海辺の塩屋からは、塩竈の初焼を献上していたといい、神祠の傍らに瓶や桶を置いて、初生りの茄子や瓜などを塩につけて熱田神宮の神前にも供えたことから、「藪の中の香の物」として知られるようになったという。また『尾張名所図会』では、阿波手



社の祭神を日本武尊とする。香の物の故事についても、昔、萱津の里に市があったころ、近隣の農夫が瓜や茄子、大根の初生りを熱田宮に献上しようとしたが、道が遠いので、阿波手の杜の竹林の中に甕を置き、さまざまな蔬菜と塩を人々が思い思いに投げ入れて製した漬物を献上したのが始まりと説く。この土地の名産となったが、路傍を行く人々が勝手に

取って食べたりするので、正法寺の境内に甕を移して、その後も熱田宮への奉納を続けていたようだ。なお、この阿波手社は、愛知県海部郡甚目寺町に萱津神社として現存する。祭神は鹿屋野比売神、全国でも珍しい漬物の神様とされる。(山本)

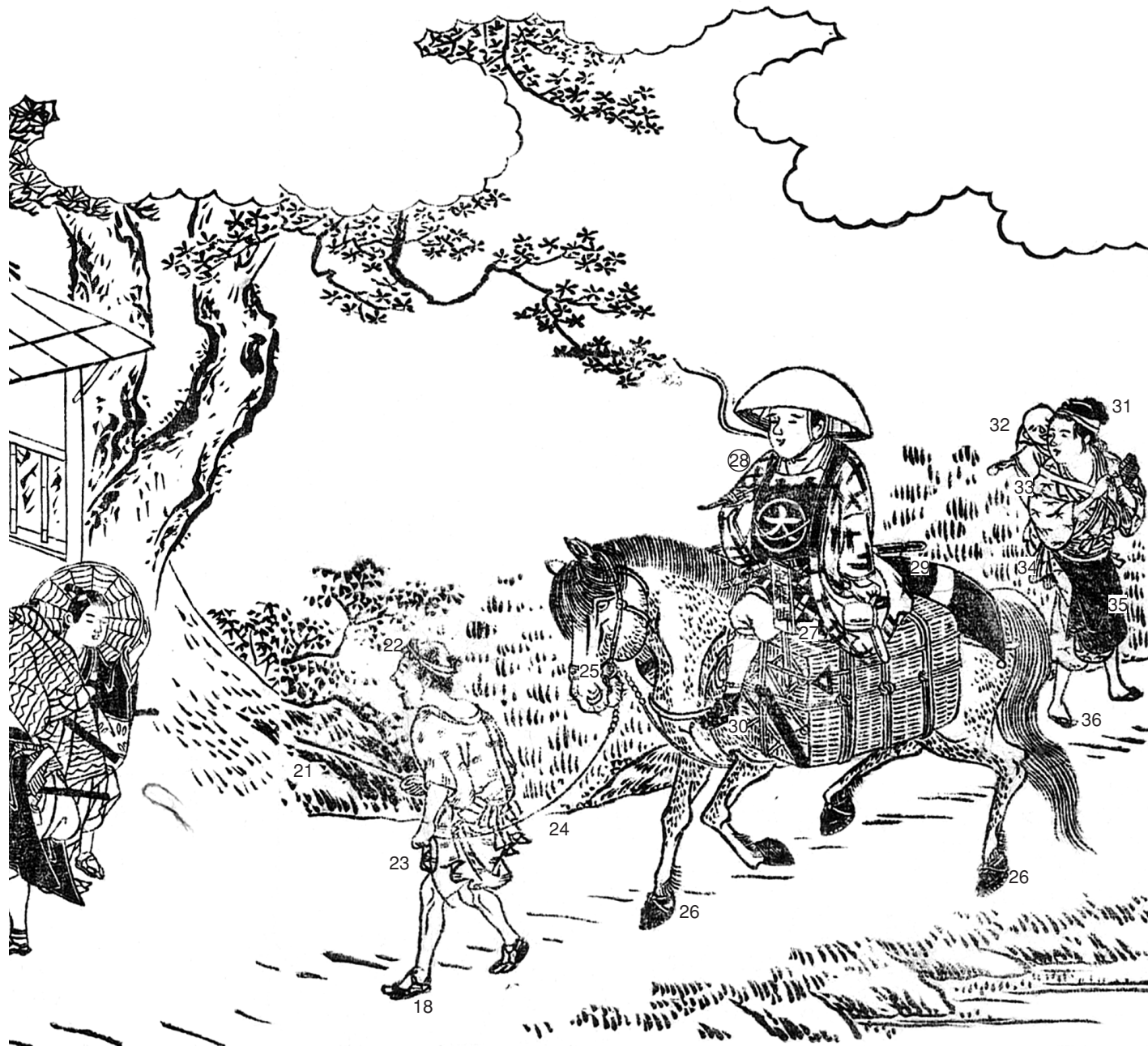
44 藤枝瀬戸の染め飯

- | | |
|-------------|-------------|
| 1 草屋根 | 19 「瀬戸染飯」 |
| 2 下屋 | 20 菅笠 |
| 3 鉄瓶 | 21 鞭 (和漢) |
| 4 囲炉裏 | 22 向う鉢巻 |
| 5 蒸籠 | 23 煙草入れ |
| 6 竈 | 24 手綱 |
| 7 姉さんかぶり | 25 轡 |
| 8 火箸 | 26 馬の脊 |
| 9 餅米 | 27 「定飛脚」 |
| 10 笊 | 28 乗り掛け |
| 11 山梔子 | 29 明荷 |
| 12 桶 | 30 足袋 |
| 13 煙管 | 31 鉢巻 (膝栗毛) |
| 14 煙草入れ | 32 赤子を負ぶう女性 |
| 15 両掛け (用心) | 33 おんぶ紐 |
| 16 縁台 | 34 帯 |
| 17 脚絆 | 35 前垂れ (守貞) |
| 18 草鞋 | 36 草履 |



東海道に面した茶屋風の簡素な建物である。店の奥には竈が設けられており、その前に老女が座り、火を燃している。竈には釜が乗せられ、その上には蒸籠が積み重ねられている。釜の湯がわき上がる蒸気で染め飯を蒸しているのであろう。店の前には床几が置かれている。そこには荷物をおろして、煙草をくゆらして、休憩している男性がいる。男性は床

几に座っているが、片足は折り曲げて床几の上に置き、片足のみ地面に付けている。このような胡座を半分かくような姿は、図像の中でしばしば見られる。縁台の前には染め飯を入れた箱が置かれており、今一人の旅人がそこに手を伸ばして取り出そうとしている。この染め飯は藤枝宿近くの瀬戸村の名物で、本文で名物染飯として「瀬戸村の茶店に売るなり、



強飯を山梔子にて染めてそれを摺つぶし小判形に薄く干し乾かしてうるなり」と記している。

店は東海道に面している。街道には乗り掛け馬に乗った定飛脚がのんびりと煙草をくゆらしながら進んでいる。その背後には赤ん坊を背負い紐でおんぶした子守の姿が見える。(福田)

45 箱根湯本の挽物細工店

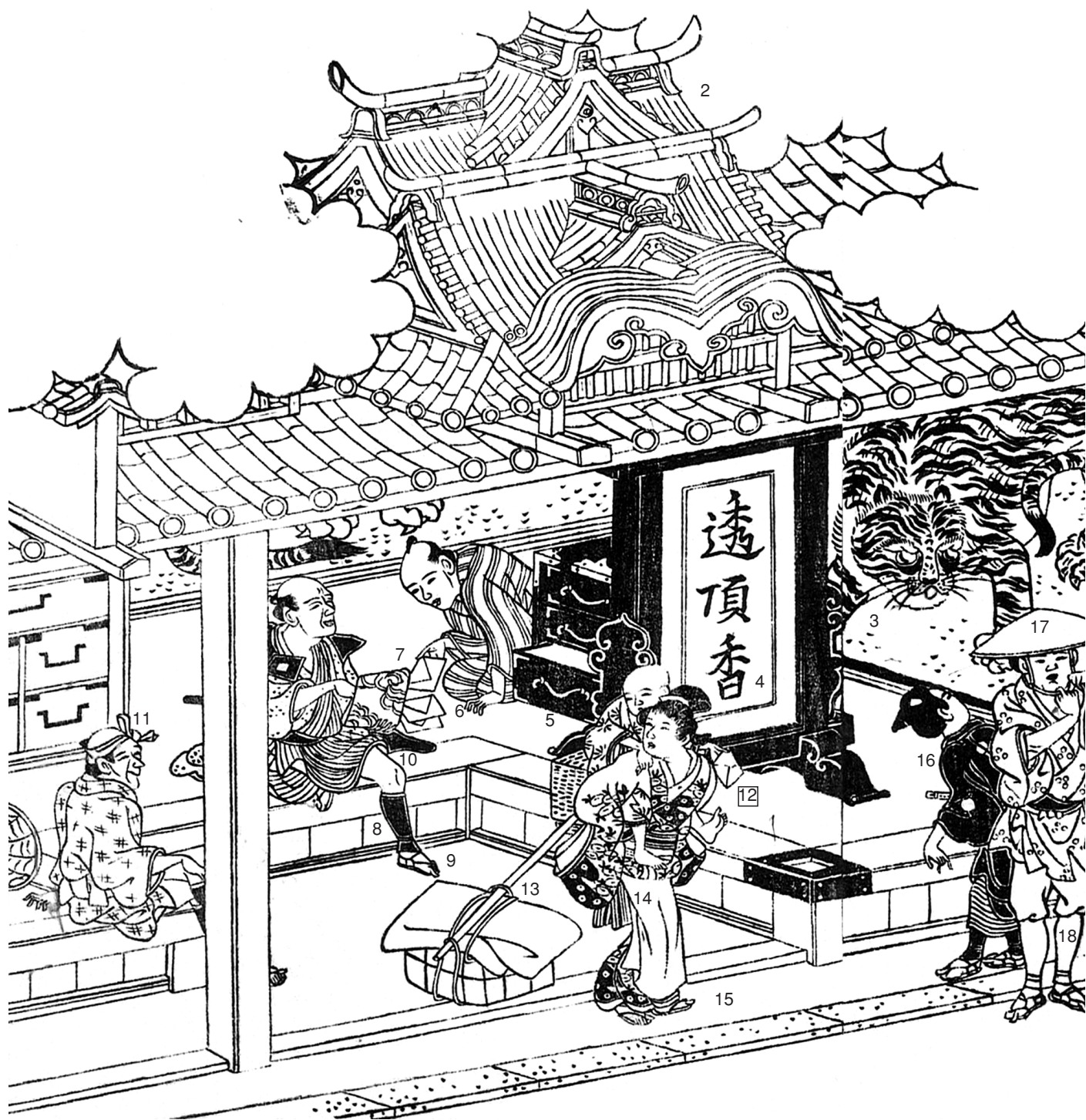


箱根挽物細工の店伊豆屋の店先を描く。箱根細工とも呼ばれる挽物細工がみやげ物として販売されるようになったのは寛政年間で、本図が描かれた時期に重なる。箱根七湯への湯治客の増加に伴いみやげとしての需要が高まっていったという。本文の「花美なる諸品を細工して色々彩り塗て店前に飾る。また雛の芥子人形の細工をしおらしくして、わずか方寸の箱に百品二百品も入れるなり。伊豆屋の店諸品多し」と記された品々を図から特定することはできないが、品選びをし買い求める人々の姿から、名店として知られ、紀行文、道中記などにも記されてきた伊豆屋の有様がうかがえる。湯本茶屋村名主定右衛門が営む伊豆屋は箱根挽物細工の店というだけでなく、門構えや玄関をつけることを許され、参勤交代の諸侯の休所ともなり、旅館組合として知られる「浪花講定宿帳」に指定された茶屋でもあったといい、縁台で休息する客に茶菓らしき物を盆に載せて運ぶ女性も見える。湯本茶屋村の中程、箱根に向かう右側にあったという伊豆屋前の街道を行き交う武士、槍持ち、運搬を業とするらしき人々、駕籠に乗る者といった旅する人々の姿が描かれ興味深い(『箱根路歴史探索』)。(中村)

- 1 看板「伊豆屋」
- 2 暖簾
- 3 箆筒
- 4 縁台
- 5 扇子
- 6 煙草を吸う
- 7 草屋根
- 8 槍
- 9 杖
- 10 脚絆

- 11 荷を背負う
- 12 行李
- 13 山駕籠(守貞)を担ぐ
- 14 羽織
- 15 両掛け(用心)

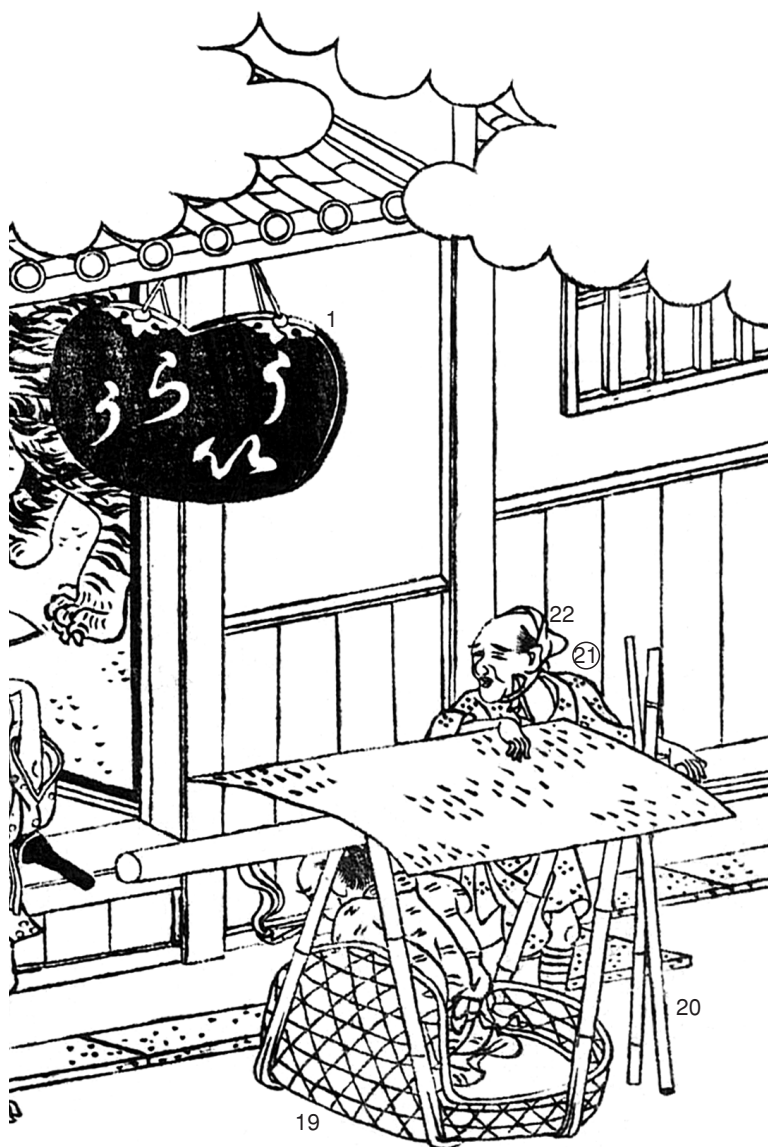
46 小田原ういろう



小田原^{ういろう}外郎家の店先を描く。看板に見られるように正名は透頂香^{とんちんこう}であるが、透頂香が外郎家の扱う代表的薬であったため外郎といえばそれを指すようになった。『東海道中膝栗毛』にも「これが名物のういろうだ」「餅かとおもったら、くすりみせだな」と記されているように、江戸時代には万能薬として

知られた東海道小田原宿の名物であり、外郎売の姿は歌舞伎の舞台にも登場しよく知られるところとなった。虎を描いた襖や置き看板、薬を入れる箆筒の置かれた店内には財布から支払をしている客の他にも、順を待つ者、これから店に入ろうとしている者、駕籠に乗ってやってきた者、そして買い物を終えた

- 1 看板「ういろ」
- 2 八棟造
- 3 襖
- 4 置き看板（守貞）「透頂香」
- 5 小箆筥（守貞）
- 6 外郎
- 7 財布
- 8 脚絆
- 9 草鞋
- 10 柄袋
- 11 鉢巻（膝栗毛）
- 12 子どもを負ぶう
- 13 両掛け（用心）
- 14 前垂れ（守貞）
- 15 草履
- 16 紋付（守貞）
- 17 笠
- 18 股引
- 19 山駕籠（守貞）
- 20 駕籠かき棒
- 21 駕籠人足（膝栗毛）
- 22 頬被り



子どもを負ぶった女性などが描かれており、繁盛している様が見える。図に描かれている城郭風の特徴ある屋根の造りは膝栗毛にも「屋根にでへぶでくまひくまのある内だ」と記されているが、今日も外郎店に復元されており格好の目印となっている。なお、「餅かとおもったら」と言わせた蒸菓子のういろ

は、外郎家で作った中国風の蒸菓子が民間に伝わり、同じくその名で呼ばれるようになって今日にいたったものだという。（中村）